立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１３年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　現代心理学　研究科　映像身体学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程１年	根本裕道　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	現代心理学部映像身体学科・教授	宇野邦一　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	音の知覚におけるノイズの創造性に関する哲学的考察		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程１年	根本裕道	
研究期間	２０１３　年度		
研究経費	（支出金額）　200　千円　／（採択金額）　200　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は音とノイズの問題を身体の側から研究する試みである。「ノイズの創造性」を指摘することが目的であるが、その際身体の問題として知覚や感覚を論じ、その中で見出されるノイズの位置や機能を考察した。それに伴ってノイズという概念を再考する必要もあり、単に音の問題としてのノイズや、音楽理論の中で位置づけられるノイズに対して新たなノイズ概念の提示を行った。ノイズに関する哲学的考察が主要な目的であったが、ジル・ドゥルーズの強度概念を手がかりに議論を進めることで、目的であった「ノイズの創造性」を描くことが出来た。ノイズ概念の再構築を行うことが出来たのは充実した成果であると考える。本研究は理論的なアプローチを取っており、原理論の構築に重点を置いたが、この成果をもとに、今後は実証的なアプローチから個別事例の研究を行うことを目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　ノイズ　〕〔　強度　〕〔　知覚と感覚　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

研究成果の概要として、最も重要な成果の一つが「ノイズ概念の再考」というものである。研究の方法論として、音楽理論や音響学におけるノイズを考察するのではなく、哲学的にノイズを考察するという方法を採用した。そのため、＜ノイズ＞という概念を整理する必要が生じ、その中で概念を再考し、再構築することで新たなノイズ概念を提示したことが大きな成果の一つである。

【研究の概要】

本研究は音とノイズを身体の側から考察するという方法を取った。本研究は音と身体に関わるため、音響学、音楽学、知覚心理学、身体学など、哲学に限らず多くの学問領域に関係するが、「映像身体学」という専攻の特色を踏まえ、問題提起を行った。「ノイズの創造性」を巡る本研究の概要は以下に要約することが出来る。一つ目は、音に関する問題として、音としてのノイズを考察することである。例えば、未来派において初めて音楽の中にノイズが導入され、そこでノイズの概念や意義が刷新されることになった。これによりノイズという音の特性が音楽の中でも問題となり、研究の対象となった。未来派においてノイズは肯定的に見出されるが、その内実を明らかにすることが課題の一つであった。二つ目は、身体の問題としてノイズを扱うことである。音としてのノイズではなく、身体に関わる何らかの作用や機能としてノイズを考察することを試みた。ここで議論の対象となったのは、身体が音と関わるための知覚や感覚という問題である。ノイズを中心に据えた問題設定のなかで知覚や感覚の機能を整理し、ノイズが身体に関わる聴覚的特性として見出されることを提示した。

研究題目にあるように、「音の知覚におけるノイズの創造性の関する哲学的考察」が本研究の大きな枠組みであり、上述した方法論や目的意識のもとでその研究に取り組んだ。その中でも「ノイズ概念の再考」という課題に集中的に取り組んだ。本研究の論点をまとめると、①音楽に関わるノイズ、②知覚や感覚という問題と身体に関わるノイズ、③ノイズ概念の哲学的考察、という３点が挙げられる。これらを踏まえて「ノイズ概念の再考」を行ったが、以下でこの研究成果についてまとめる。

【研究成果の概要―ノイズ概念の再考に関して】

・研究の目的と方法

映像身体学という学問分野から音の問題を思考するため、まず問題の設定は身体を軸になされる必要がある。この分野において、例えば映画を挙げるなら、映画が単に視覚的な表現として作品分析の対象となるだけでなく、「視る」という行為や、光と振動というものに至るまでが研究対象になっている。ここでは身体を基準にして映画や機械映像が研究されているが、音楽や音響に関する映像身体学的考察はあまりなされていない。ノイズという音の問題も、音楽学や音響学、あるいは環境デザインのなかで研究されているが、身体の問題として取り上げられることがなかった。そこで身体との関連でノイズを考察するという方法でもって、ノイズの概念の再構築を目的とする研究を行った。

研究の流れに関して、まず一つ目に、未来派という芸術運動によって初めてノイズが音楽に持ち込まれたことを踏まえ、特に未来派のルイジ・ルッソロという人物がどのように音楽にノイズを持ち込み、またノイズをどのようなものとして見出していたかについて考察を行った。ルッソロ本人の文章だけでなく、未来派総論やその他の音楽家や音楽理論家などの議論を参照しつつ、ノイズがどのようなものとして見出されているかを検討した（上述の論点①の音楽に関わるノイズに相当する、以下同様）。二つ目に、知覚や感覚の問題系として、まずは音の知覚の分析を行った。音を聴くという知覚的な行為について、ロラン・バルトの聴取の類型や、J. J. ギブソンの生態学心理学的な知覚論を参照し、能動的である知覚の機能を整理し、考察することで、この知覚的な次元でノイズがどのように見出されるかを論じた。また同時に感覚という問題も扱い、知覚と感覚の区別を厳密に行った。知覚と感覚の差異を認めることで、感覚に固有の領域を見出した。一般的に、能動的な知覚に対して感覚は受動的であるとされるが、知覚に従事する感覚という図式は採用せず、感覚の新たな意味を見出すことにも努めた。身体に関わるノイズという問題は、知覚と感覚の問題を介して初めて可能となった。感覚に関しては、ジル・ドゥルーズの議論を参照し、＜強度＞という概念とノイズを接続させることで、ノイズの新たな意義を見出した（論点②）。最後に、ノイズを哲学的に考察することで、ノイズ概念の再構築を目指した。ここでは他の研究者のドゥルーズ論なども参照し、ドゥルーズの強度概念をさらに深く分析した。それによってこれまでに考察してきたノイズ概念は哲学的にも考察出来るようになった。一度ドゥルーズの議論を整理し、考察することによって、ノイズ概念の再構築が可能となった（論点③）。

研究成果の概要　つづき

・研究成果

上述の三つの論点を踏まえて研究を進めたが、その成果に関してもそれぞれの論点に沿って要約する。

①音楽に関わるノイズ

まず、一つ目の論点に関して、ここでは主にルッソロのノイズ概念を検討することから始めた。ルッソロのノイズの定義は「感性を拡張させるもの」であることを見出した。一般的に、音楽の中でのノイズは楽音に対置される否定的なものとされているが、ルッソロはそのような否定項としてノイズを規定するのではなく、ノイズをそれ自体で積極的な意義があるものとして捉えていた。騒音として考えられるノイズの定義は、望ましくない音、非楽音、大きな音、信号体系を乱すもの、というように多くは否定的な意味合いを持っている。しかし、ルッソロの活動や文章を考察していくと、「感性を拡張させるもの」という価値をもったものとしてノイズを捉えており、そうなるともはや非楽音や騒音、雑音に留まるだけでなく、感性に関わる問題として展開する可能性を見出すことができた。ルッソロのノイズ概念を考察すると、身体の問題を経由しなければならないことが分かり、その課題を更に展開した。

②知覚や感覚という問題と身体に関わるノイズ

ノイズを考察するためには身体の問題も扱う必要が生じた。そこで「聴取」という知覚の様態の分析を行った。聴取の様態はまず、能動的な「聴く」という行為と、受動的な「聞こえる」という自体に区別出来た。音に対して能動的に関わる場合に知覚の問題があり、受動的に関わる場合に感覚が問題となる。その中でノイズがどのようなものとして見出されるかを検討したが、知覚の段階においては、ノイズは「知覚の外部」あるいは「知覚の剰余」というように規定された。ノイズ概念に関して、ルッソロの定義は「感性を拡張させるもの」であり、この知覚の場面で規定されるのは「知覚の剰余」という定義である。更に議論を感覚の次元にまで進めていくと、ノイズは「聴取における強度」であると見出された。知覚と感覚の問題を扱うことで、ノイズと強度を接続することが必要になったが、このドゥルーズの強度概念を考察するという新たな課題が生じたが、それによって本研究の展開可能性も広がった。

③ノイズ概念の哲学的考察

ノイズ概念を徐々に再構築する手続きを踏まえてきたが、強度概念と接続することで、ノイズは新たな存在の位置を獲得することが分かった。知覚から感覚へ移行することで、ノイズは周辺的な存在であることから、新たな聴取の組織化を促す肯定的な存在として見出すことが出来た。ドゥルーズの言う差異や強度が経験の成立を支えているように、ノイズも聴取を支え、形成している契機であった。ドゥルーズ哲学を参照することで展開出来た問題は、能動的知覚／受動的感覚という図式が有効でなくなるような、固有の経験領域を見出すことができたことである。そのため、ノイズも単に知覚／感覚、能動／受動、聴く／聞こえる、音／振動といった二項対立のもとでは考察出来なくなった。しかし、この段階に至ることで初めてノイズは即時的な存在として規定されるようになった。ここまでの一連の研究の手続きを経ることで、ノイズは「新たな聴取の組織化を促す創造的な契機」として規定することが出来た。ノイズ概念の再考ということで、この定義を導き出せたのは意義のある成果であると考える。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文（1件）
・根本裕道「聴取におけるノイズと強度―ノイズ概念再考」『立教映像身体学研究』、第 2 号、2014 年、p.5-25

② 図書（0件）
・なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催（0件）
・なし

④ その他（2件）
・根本裕道「耳慣れない音楽―ジャンデックと動揺する聴取」、第 1 回大学院生企画研究会、2013 年 6 月 28 日、立教大学新座キャンパス

・畑山良太・根本裕道・河野真理江「第 1 回大学院生企画研究会「Jandek Friday」報告」『立教映像身体学研究』、第 2 号、p.78-79